

## キリスト教叙事詩の成立

— ミルトンとドライデン —

村 川 満

## I

ドライデン John Dryden (1631~1700) がミルトン John Milton (1608~1674) の『失樂園』 *Paradise Lost* にもとづいて『無垢の状態』 *The State of Innocence* と題するオペラを作ったのは、『失樂園』の初版出版(1667~9)から数年しかたたない1674年頃だったと考えられる。<sup>(1)</sup> これをもってしても、彼が早くから、同時代の先輩詩人ミルトンとその『失樂園』になみなみならぬ関心と尊敬とを払っていたことがうかがわれるが、1677年この作品の出版の時に付した序文の中では、「原作は疑いもなく、この時代またこの国民が生み出した最も偉大な、最も高貴な、最も崇高な詩の一つである」<sup>(2)</sup> と述べて、『失樂園』に最高の讃辞を呈している。

ところで、ドライデンのこのような『失樂園』に対する関心と尊敬とは、同じ序文の中で、「英雄詩は人間性の最大の仕事とこれまでみなされてきたし、今後もそうみなされつづけるだろう」<sup>(3)</sup> と言っているところにもみられるように、彼の叙事詩そのものに対する関心と尊敬とに深く内的に結びついている。もちろん、あらゆる文学のジャンルの中で、叙事詩に最高の尊敬が捧げられていた17世紀の文人として、当然ドライデンの叙事詩に対する関心は早くからのものであったが、彼の

叙事詩に対する評価には、その生涯において、変化あるいは進展がみられる。たとえば、初期の代表的エッセイ『劇詩論』(1668)では、悲劇をむしろ叙事詩よりも上においている。<sup>(4)</sup> それから数年後の『英雄劇論』(1672)では、「英雄詩は、韻文による表現方法の中で、最も高貴な、最も快い、最も教育的なものであり、同時に人生の最高の範型である」<sup>(5)</sup> と述べているが、なお劇には叙事詩にまさる1つの利点があると言っている。ところが、それから数年後ドライデンは、いままで書き続けて来た英雄劇をやめることになるが、その最後の作品 *Aureng-Zebe* (1675) に付した手紙の中で、「私はまだいくらかのささやかな希望をもっています。それとても、自分の能力を考えるとむだかもしれませんが、それは英雄詩を書いて、これまでのたくさんのまづい劇のつぐないを世間にいくらかでもしたいということです。閣下はかねてから私の計画を御存知でした」<sup>(6)</sup> と述べて、彼自身の叙事詩制作の意図について語っている。このことについては晩年のエッセイの中でも言及がなされ、そこでは、この叙事詩制作をいわば自分のライフワークとして、その完成のために劇場を離れたのだと語っている。<sup>(7)</sup> この時期がちょうど、最初に引用した序文の書かれた時期であることを考えると、そこに示されているドライデンのミルトンに対する関心と評価が、彼自身の

1) W.R.Parker, *Milton: A Biography*. 2 vols. (Oxford, 1968) pp. 634—5.

2) この序文の題は *The Author's Apology for Heroic Poetry and Poetic Licence*. *Dryden's Essays*, ed. George Watson, 2vols. (Everyman's Library) vol. 1. p.196. 以後ドライデンからの引用はすべて本書による。引用にあたっては Watson, I, 196. のごとく略記する。

3) Watson I, 198. ドライデンは epic と heroic poetry を区別なしに用いている。

4) *An Essay of Dramatic Poesy*, Watson, I, 87—88.

5) *An Essay of Heroic Plays*, Watson, I, 162.

6) Watson, I, 191.

7) Watson, I, 91.

叙事詩に対する関心の深まり、そして叙事詩制作の意図と深くつながっていることがわかる。ここから更に晩年になると、たとえば『風刺詩論』(1693)でも、『「アエネイス」の献辞』(1697)でも、「英雄詩はたしかに人間性の最大の仕事である」<sup>(8)</sup>「英雄詩は疑いもなく人間の魂がなしとげ得る最大の仕事である」<sup>(9)</sup>とほぼ同じ言い方がなされており、又悲劇との比較においても、若い時とはちがって、叙事詩の優越が詳論されていて、ドライデンの叙事詩に対する尊敬と関心とは、変わっていないどころか、かえって深まっているのがわかる。

ところが、ミルトンに対しては、高く評価しつつも、きびしい批判を下しているのがみられる。たとえば『風刺詩論』の中では、「ミルトンの主題は正しく英雄詩とよべるものの主題ではない。彼の構想はわれわれの幸福の喪失である。彼の結末は他のすべての叙事詩の場合のように幸いなもの (prosperous) ではない。超自然的存在 (heavenly machines) はたくさんいるが、人間は2人だけである」<sup>(10)</sup>とされており、『「アエネイス」の献辞』でも、「もしも悪魔がアダムにかわって主人公となっていなかったら、もしも巨人が騎士を打ち負かして紫から追い出し、遍歴の婦人を供に、世界を放浪させるようなことになっていなかったら、『失樂園』は叙事詩としての資格をよりよくそなえているだろう」<sup>(11)</sup>とされている。この批評の当否はともかく、ここでドライデンが『失樂園』を叙事詩として成功したものともみていないことは明らかである。そこで問題となるのは、深まりゆく叙事詩への関心の中で、彼がミルトンに対してネガティブな批評を下しているのは何故かということ、又彼の叙事詩制作の意図とのつながりはどうかということである。これを明らかにするためには、この批評の根底にある彼の叙事詩観をみなければならない。

## II

ドライデンは『風刺詩論』の中で、叙事詩において「これまでにホメロスとウェルギリウスの卓越性に到達したものはおろか、近づいたものさえひとりもない」<sup>(12)</sup>と述べているように、完全な叙事詩は、彼の眼からみれば、ホメロスとウェルギリウスで、その規準からみると、『失樂園』は多くの欠陥をまぬがれず、叙事詩として成功したものとは認められないのである。ミルトンだけでなく、現代の詩人たちがみな叙事詩を書こうとして失敗しているというのが彼の判断である。<sup>(13)</sup>ここから彼は、Milton, Spenser, Ariosto, Tassoなどを個別に批評するにとどまらず、彼らに共通した問題点を取り出して、その原因をさぐるようとしている。

彼によれば、現代の詩人たちの失敗の原因は、彼らが才能と学識において古代人に劣っているからでも、用いている言語が劣っているからでもない、欠陥はわれわれの宗教、キリスト教にある、と言って次の2点をあげている。すなわち第1は、キリスト教のすすめる徳、たとえば忍耐、受苦、謙遜などが、英雄詩の内容となる英雄的行為の正反対であるということ。第2は、キリスト教にあっては、叙事詩に用いられる超自然的なものの働き (machines) が、異教の場合よりはずっと限定されてしまうこと。

しかし、このような難点を克服して、ホメロス、ウェルギリウスに劣らぬ純粋にキリスト教的な叙事詩を書く可能性があるとしてドライデンは考える。まず第1の難点については、私人としての徳と公人としての徳とをわけて、「私人としてのキリスト者の徳は忍耐、従順、服従などであるが、長官や将軍や王の徳は思慮、分別、能動的堅忍、強制力、威令、正義と度量の行使である」<sup>(14)</sup>から、こういう指導者達の英雄的行為を主題としてキリスト教叙事詩を書くことができると考える。

8) *A Discourse Concerning the Original and Progress of Satire*, Watson, II, 96.

9) ドライデンの英訳した Virgil の *Aeneis* に付したもの, Watson, II, 223.

10) Watson, II, 84.

11) Watson, II, 233.

12) Watson, II, 82.

13) Watson, II, 85.

14) Watson, II, 86.

第2の難点については、「キリスト教詩人はこれまで自分の力をよく知らなかったのだ。もし彼らが旧約聖書を正しくしらべていたならば、そこに自分の仕事にふさわしい超自然的存在の働き (machines) を見出していただろう」<sup>(15)</sup> と述べて、旧約聖書の『ダニエル書』の天使論をキリスト教化されたプラトン哲学の原理と結びつけることによって、望みどおりの結果がえられるとしている。

以上のような批評や提案を通じてはっきりあらわれていることは、ドライデンが単に批評家としてではなく、作家として、すぐれた叙事詩を書く道を発見しようという姿勢をとっているということである。彼自身このような考えが、自ら叙事詩を書くことを志した過程の中で長く思ひめぐらされたものであり、実行に移そうと思ったものであることを明らかにしている。<sup>(16)</sup>

しかしながら、奇異なことには、このエッセイを書いている時、彼は実際には、自分で偉大な叙事詩を書くという望みをもはやすてていたのである。望みの大きさと長年の努力とを考えると、それは悲劇的とさえ言えることである。このような挫折の原因はどこにあったのであろうか。

これについて彼自身はこう言っている。「国王チャールズ2世からは、美辞をもってはげまされただけで、僅かの俸給もきちんと支払われず、将来の生活の見込みも立たなかったのです、私は自分の計画の初めにおいてくじけてしまった。そして今は、老齢に迫られ、もっと耐え難い悪である欠乏が時代の変化によってやって来て、私の力を全く奪ってしまったのである」<sup>(17)</sup>

しかしこの説明はあまりに外面的にすぎて、本当の原因を示しているようには思われない。ただ、ここにはブレドヴォールドが「彼は文学に対する愛と文学で名声を得たいという願いともかわからず、自らが、自己の最大の作品たらしめようと思ったものを達成できるほどには heroic で

はなかった」<sup>(18)</sup> と言っているような彼の性格があらわれていて、後にみるミルトンの場合と対照的に、彼の挫折の1つの原因が示されているように思われる。

次に、性格とならんで、彼の時代が彼に念願の叙事詩を書くことをさまたげたように思われる。というのは、彼が計画していた叙事詩は、愛国的意図をもったもので、その主題としては、アーサー王か黒太子エドワードのことが選ばれるはずであったが、<sup>(19)</sup> このような企ては、平和と秩序と国力の発展の期待が朝野に満ちていた王政回復(1660)直後の時期にはふさわしいものであったも、その後の国情は最初の期待を大きく裏切るもので、このように国家に対していわば幻滅が感じられているところでは、その企ては実現され難いものであった。また時代の風潮も、前の時代の理想主義的情熱を失って、批判的、懐疑的になって、真摯な叙事詩を生み出すには適していなかったと考えられる。

最後に、彼の叙事詩観が、すでに見たように、古典叙事詩の規範にとらわれすぎていて、新しい時代、新しい状況の中で、それを体現する叙事詩を書くという柔軟性に欠けていたことが指摘されなければならない。そしてここに、彼の叙事詩人としての挫折の原因があると同時に彼のミルトン批評の根本問題があるように思われる。このことは彼とは対照的なミルトンの場合を考察することによって、より明らかとなるであろう。

### III

さて、ミルトンが畢世の叙事詩『失樂園』に着手したのは、オーブリの伝えるところによると、王政回復(1660年)の約2年前のことで、ミルトンが50才に手が届こうという時であった。<sup>(20)</sup> しかし「選ぶこと古く、筆をとること新しく」(long choosing, and beginning late IX, 26)<sup>(21)</sup>

15) Watson, II, 88.

16) Watson, II, 91.

17) Watson, II, 92.

18) Louis I. Bredvold, *The Intellectual Milieu of John Dryden*, (The Univ. of Michigan Press, 1959) p. 8.

19) Watson, II, 92.

20) これについては58年, 55年, 52年等諸説がある。

21) 以後ミルトンからの引用は原則として Merritt Y. Hughes (ed.), *John Milton: Complete Poetry and Major Prose* (N.Y., Odyssey Press, 1957) により, Hughes と略記する。*Paradise Lost* からの引用は書名を略し, 巻, 行だけしする。

と彼みずから語っているように、その構想ができたのはもっと前のことであり、更に明確な構想ということを離れて、ともかくも祖国のために偉大な叙事詩を書きたいという願いをもった時を考えれば、それは遙か以前のことになり、ティリヤードがしているように、ミルトン19才の時の詩 *At a Vacation Exercise* (1628) から『失樂園』の歴史をはじめるとも不可能ではないだろう。<sup>(22)</sup> それはともかくとして、ミルトンは非常に早くから、自分が聖なる目的のために捧げられたものだという使命感をもっていた。それは真のキリスト教詩人たることであり、そこには当然叙事詩人たることが第1のこととして含まれていたことは疑いをいれないところであろう。しかし真の叙事詩人たることは、詩人としての内的成熟 (inward ripeness—Sonnet VII) をまっしてはじめて可能なことで、そのためにはきびしい知的道徳的自己研さん、十分な経験を必要とすると彼は感じていたのである。『スメクティムニューアス弁護書』 (1642) の中の次の言葉——ミルトンの21才頃のことをしるしたもの——は、このようなミルトンの自覚をよくあらわしている。

「それから程なく、私は次のような考えをかたくいざようになった。すなわち、今後称賛すべき事柄について立派に書こうという望みをくじかれたくない人は、みずからが真の詩でなければならぬ。つまり、みずからが最もすぐれた、最も尊敬すべきものの集成であり、典型でなければならぬ。また称賛に値するすべてのものを、みずから体験し、実行しているのでなければ、英雄的人物や有名な都市にたいする気高い称賛がうたえるものと思ひ込んではならない」<sup>(23)</sup>

彼は1632年 (23才) に大学を出て、5年間ロンドンの片田舎ホートンへ退いて「ギリシャ、ラランの作家を貪るように読みふける」猛烈な勉強に身を捧げ、又その間に『コマス』 *Comus* や『リシダス』 *Lycidas* のような作品も書いているが、これらのことも、更にそれに続くイタリアの旅も、すべてが叙事詩人たるのに必要な準備であ

り、それを自覚する厳粛な使命感に貫かれたものであった。ホートンにいた間に自分の書くべき叙事詩についていろいろ思いをめぐらしたことは想像にかたくないが、その思いがイタリア旅行中にいわば結晶して、アーサー王と円卓の騎士をテーマとする叙事詩の計画となってあらわれるのである。そのことについてはっきりのべているのはラテン語の詩『マンソ』 *Mansus* (1639) と『デモン墓碑銘』 *Epitaphium Damonis* (1640) とである。

この叙事詩『アーサー王』 *Arthuriad* は、もし書かれておれば、アーサー王を中心人物とし、イギリスの歴史をその神話的なあけぼのから無敵艦隊の撃破にいたるまで包括し、イギリスの偉大な過去と未来とを賛美しようとする愛国的意図のものとなっていたと考えられる。<sup>(24)</sup> ——アーサー王をテーマとする愛国的叙事詩はドライデンも企てたところであった。——しかしこの詩はついに書かれないで終わった。何故、また何時、ミルトンがこの計画を放棄したのかはどこにも語られていないので推測するほかはない。

その直接の原因と考えられるのは、彼がイタリアから帰国後すぐに、叙事詩の材料を集めるために始めた英国史の勉強から、アーサー王の歴史性にたいする疑問が生じてきたことであろう。叙事詩人は真理を語るべきであると信じているミルトンにとってこれは決定的なことであったと思われる。<sup>(25)</sup> そうだとすると『アーサー王』の放棄は1640年にすでになされていたとも考えられる。

しかし『アーサー王』が書けなくなったとしても、英国史のなかの英雄、たとえばアルフレッド大王などを主題とした愛国的叙事詩を書くことは可能であった。事実、同じ頃の『ケンブリッジ覚書』 *Cambridge Manuscript* の中にしるされている多くの劇の題目の中で、叙事詩の題目を暗示する唯一のものがアルフレッドであることや、1642年の『教会政治の理由』で叙事詩の主題が語られている際に、アーサー王が言及されず、「どういう王または騎士がキリスト教的英雄の典型と

22) E.M.W. Tillyard, *The Miltonic Setting* (London, Chatto and Windus, 1938) p.170.

23) *Apology for Smectymnuus*, Hughes, p.694.

24) Tillyard, *op. cit.* p.191.

25) Parker, *op. cit.* p.190 ; C.M. Bowra, *From Virgil to Milton* (London, Macmillan, 1945) p.195.

して選ばれるべきか」<sup>(26)</sup> と、ためらいあるいは未決定の態度を示していることは、そのことを裏付けていると考えられる。<sup>(27)</sup> 以上のことから、1640年にミルトンが『アーサー王』を放棄していたとしても、1642年の時点においてなお彼が愛国的叙事詩をこころぎしていたことはたしかである。しかしこの1642年から『失樂園』までの間には彼の叙事詩の計画について語ることは何もない。従って次の問題は、英国史に題材をとった愛国的叙事詩が棄てられて、人類の墮落を扱う『失樂園』が書かれるに至ったのは何故かということである。これについても彼は何も語っていないので推測するほかはない。

#### IV

1639年の夏頃、祖国の危急を聞いて、自由のための戦いにみずからも何らかの形で参加しようと決意して、イタリア旅行から急いで帰国したミルトンは、やがて革命の嵐の中にみずからのペンをもって身を投じることになる。1641年の最初の論争的論文『イギリスの教会規律の改革について』は、その当時のミルトンの高揚した感情をよくあらわしている。そこで彼は、監督制を打ち破ることによってイギリスに新たな黄金時代を打ち立てることができると信じ、自分がその新秩序を祝うべく選ばれた詩人であると考えて、白熱的な文章で次のように書いている。

「そのとき、聖徒たちのうたう讚美歌やハレルヤの歌声にまじって、あらゆる時代を通じ汝がこの国に示し給う聖なる恩恵と奇しき審判とを、新たにして雄大なる旋律もて、高らかに歌い讚えんとする者の声が聞えるであろう。ここにおいてこそ、この偉大にして勇敢なる国民は、真理と正義とを不断に熱烈に行なうべく教え慣らされ、旧悪の弊衣をかなぐり捨て、その時代の最も真剣、賢明にして、最もキリスト教的国民なりとの判定を得べく、高く喜ばしき競争に争って馳せ参ずるで

あろう。その日には、永遠にして待つこと暫しの王なる汝は、この国を裁かんために、雲を開き、信仰あつくして正しき共和国に国家的名誉と報酬とを分ち与えつつ、地上のあらゆる専制政治を終熄せしめて、天と地とにくまなく、汝の普遍的にして平穩な王国を宣べ伝えるであろう」<sup>(28)</sup>

ミルトンの心では、革命の成就と神の国の到来とが一つに重なり、しかもその神の国はイギリスに来ようとしているとさえ考えられているのである。

しかし、このようなあまりにも熱狂的な期待は、やがて現実によって裏切られなければならなかった。内乱の結果は、彼の支持した議会派の勝利におわたったが、彼の期待したような状態を生み出しはしなかった。それのみか、「新しき長老は、昔の司祭に輪をかけたものに過ぎない」 (*New Presbyterian is but Old Priest writ Large*)<sup>(29)</sup> というのが彼の発見であった。1644の『アレオパジティカ』は、そのような議会の長老派にたいする力強い抗議の書であった。しかしそこではなお、イギリス国民の将来に大きい希望を表明しているのが見られる。

「神の恩恵と愛とは、特にわが国民にたいして慈悲深く向けられている」<sup>(30)</sup>

「高貴で強力な国民が、眠りから覚めた力士のごとく、立ちあがり、敗ることを知らざる頭髪をゆすぶりふるうさまを、心の目に見るように思う。驚のごとく、羽がえしてたくましい青春をよみがえらせ、真昼の光線をまともに見すえて、ひるむことなく、まなこを輝かせ、使い古した視力を、天の源泉そのものによって清め、曇りを払っているさまを、見るように思う」<sup>(31)</sup>

しかし、この頃から書き始められていた『英国史』には、議会政治にたいするきびしい非難と、更にはイギリスの国民性に対する辛辣な批判とが述べられている。

「あまり言われていない真実を言えば、イギリ

26) *The Reason of Chureh Government*, Hughes, p. 668.

27) Tillyard, *op. cit.* pp. 195—198.

28) *Of Reformation touching Church-Discipline in England, Milton's Prose* (The World's Classics) pp. 62—3.

29) *On the New Forces of Conscience under the Long Parliament* と題する詩の第20行。

30) *Areopagitica*, Hughes, p. 743.

31) *ibid.*, Hughes, p. 745. 但し訳文は御興員三先生のものを拝借する。ティリヤード著「ミルトン」(研究社) 24頁。

スは戦争にかけては強く勇敢な人人が多い国ではあるが、それとちょうど対応して、平和な時に正しく思慮深く治めることのできる人人は当然あまり多くはないのだ。…太陽は果実のみならず知力をも熟させるが、我が国には、その太陽が欠けているので、葡萄酒や油が外国から我が国に輸入されるように、熟した理解と多くの徳は、外国の著作と、最もすぐれた時代の模範とから、われわれの精神の中へ輸入されなければならないのだ」<sup>32)</sup>

この言葉を先の『アレオパジティカ』や、『イギリスの教会規律の改革について』の中の文章と比較すると、ミルトンのイギリス国民にたいする気持が、全く違ったものになっていることがわかる。はじめの気持を「黙示録的な陶醉」(apocalyptic ecstasy) とよぶならば、今の気持は深い「幻滅感」(disillusionment) とでもよぶことができるだろう。ずっと後のものになるが、1666年のハイムバッハ宛の手紙の中の次の言葉は、彼が経験した幻滅感をよくあらわしていると思う。

「あなたが政治家的性格 (statesmanship) とよんでおられる美点 (私としてはむしろ祖国への忠誠心とよんでいただきたいのです)、これが美名で私をとりこにしたあげく、私をいわば無国者にしてしまいました。……祖国というものは、幸福にやっていけるところにこそあるのです」<sup>33)</sup>

このような祖国にたいする深い幻滅感の中では、祖国の栄光を賛える愛国的叙事詩を書くことはもはや不可能であった。

ドライデンの場合も、彼に念願の叙事詩を書くことをさまたげた一つの要因として、祖国に対するある幻滅があったことは前にのべたところであるが、ミルトンの場合とでは政治的状况も全くちがっており、味わたった幻滅の深さという点でも、とうてい比較にはならないと思われる。しかしより根本的な両者のちがいは、ドライデンがついに叙事詩を書かなかったこと、しかもその企図を断念した晩年になお愛国的叙事詩について語っているいわばアナクロニズム、それに対して、ミルトンが深い幻滅を味わいながら挫折せず、それを乗り越えて、別の形においてついに念願を果たしたという点にある。祖国と国民に幻滅しただけ

ではない。視力は奪われ、著書は焼かれ、投獄のうき目にもあい、全くの不遇の中でミルトンは畢生の大作の制作を続けるのである。そのような状況を次のように彼はうたいあげている。

More safe I Sing with mortal voice, unchang'd  
To hoarse or mute, though fall'n on evil days  
On evil days though fall'n, and evil tongues;  
In darkness, and with dangers compast round,  
And solitude; yet not alone, (VII, 24—28)

(より安けく人の声にて我は歌う、  
悪しき日に遇えど、げに悪しき日、  
悪しき舌に遇えど、嗚れず、黙さず、  
闇にいて、危険と孤独とに  
囲まれ、しかも孤独ならず、)

その上彼は、時代そのものがもはや崇高な叙事詩に適していないのではないかということを感じ得し、自分の年齢とイギリスという国の風土との障害をも感じながら、この仕事をやりとげるのである。

unless an age too late, or cold  
Climate, or Years damp my intended wing  
Deprest; (IX, 44—6)

(運きに過ぐる時代、冷たき  
風土、またこの年齢が、わが志す飛行を弱め  
挫かぬかぎり)

この驚くべき強靱さ、またたくましいエネルギーの秘密はどこにあるのだろうか。

## V

ミルトンがまだ愛国的叙事詩を志していた頃の論文『教会政治の理由』(1642)の中で、次のように彼は書いている。

「生まれつきの強い傾向に加えて、努力と熱心な研究(これをこの世における私の運命だと思ふ)とをもってするならば、私はおそらく、後のひとびとが死滅させることを望まないような作品を後世に残すことができるだろう。……私は自分の勤勉と技術のすべてをあげて、母国語を飾ることに向けようという決心に心を傾けた。といっても、言葉の精巧さを目指すのではなく……この国全土の我が同胞の間にある最もすぐれた、最も賢

32) Tillyard, *op. cit.*, p. 149.

33) *ibid.*, p. 200.

明な事柄を、母国語で説明し、物語るものとなるうというのである。またアテネ、ローマあるいは現代イタリアの、最も偉大な、最もよりすぐった賢者たちや、昔のかのヘブライの人たちが、それぞれの国のためになしたことを、私は私なりに、しかもキリスト者であることによって、自国のためになすことができるであろう」<sup>(34)</sup>

ここには、若いミルトンの自己の天分にたいする自負と野心と愛国的な感情がそのままに表白されている。しかしそれらが同時に、神に仕える者としての自覚と使命感と一体になっていることを見のがすことはできない。これを書いて以後やがて彼は深い幻滅感から、計画していた愛国的叙事詩をもはや書くことができなくなる。しかしここに示されている根本的なものは、それとともに消え失せたのであろうか。

『失樂園』の冒頭のところで、彼は次のように歌っている。

my advent'rous Song,

That with no middle flight intends to soar  
Above th' Aonian Mount, while it pursues  
Things unattempted yet in Prose or Rhyme  
(I, 13-16)

(文にも詩にもいまだためしなき事を  
追いつつ、アオニアの峰こえて  
ただならず高く天がけらんとする  
我が冒険なる歌を)

ここには古典叙事詩よりはるかに高い主題をうたって、前人未踏の境地に挑もうとする高い抱負があらわれている。又前の文章に見られた愛国心、つまり、母国語で偉大な詩を書くことによって、ホメロス、ウェルギリウス、タッソーらが、それぞれの国になしたことを、自分も祖国にたいしてなしたいというルネッサンス詩人に共通の愛国的意図は、『失樂園』を書くときに決して失われてはいない。それどころか、『失樂園』こそ、若い時からのそのような願望の成就にほかならなかった。彼が失ったのは、自国の過去と現在と未来とを無批判に賛美しようという単純で盲目的愛国心であって、愛国心そのものではなかった。

又その愛国心はここでは、最もすぐれた、最も

賢明な事柄を国民に示したいという、やはりルネッサンス詩人共通の道徳的、教化的意図と結びついているが、この意図、彼の言葉を用いると、「国民にとって教訓的かつ模範的な」(doctrinal and exemplary to a nation)<sup>(35)</sup> 作品を書きたいという意図は、『失樂園』においてそのまま貫かれているのである、なるほど、かつてのように自国民の中にすぐれたものを見出して称賛するということはもはやできなくなったけれども、それだからこそ、自国民に真実の道を教え示そうという彼の意図は強くなっているといえる。

『失樂園』の開巻第1行は「人間最初の不従順のことを」(Of Man's First Disobedience) ということばで始まっているが、全巻の末尾に近いところで、ちょうどそれと対応して、いわば全体の結論ともいえる形で神への服従が説かれている。

Hencefortn I learn, that to obey is best,  
And love with fear the only God, to walk  
As in his presence, ever to observe  
His providence, and on him sole depend,  
Merciful over all his works, (XII.561-4)

(今よりぞ学ばん、最善の道は従うにあることを、

唯一の神を畏れもて愛し、みまえにあるがごとく歩み、常にその御心をとし、すべての御業に恵み深き彼をのみぞ頼み、) (御輿員三訳)

これを見ても『失樂園』の道徳的、教化的意図は明らかであろう。

更にもっとも根底にあるキリスト教信仰についてみるならば、この節のはじめに引用した『教会政治の理由』の同じ個所で、彼は次のように言っている。まことの詩は、

「卑俗な恋愛病者の筆や、居候詩人の居候的激怒から無益に流れ出る詩のように、青春の熱気や葡萄酒の蒸気のなかから呼び出すべきものでもなく、また、記憶の女神と、その娘の魔女たちに訴えて得らるべきものでもなく、あらゆる言葉と知識とを賦与する力を持ち、みずからの祭壇の聖なる火もて、心にかねるひとの唇に触れ清めんために天使をつかわす永遠の霊に、敬虔な祈りを捧

34) Hughes, p. 668

35) Hughes, p. 669.

げることによって得らるべきものである」<sup>(36)</sup>

ここでミルトンは、ミュージタたちに靈感を求めて作られる異教の古典叙事詩とは違った立場に身をおいて、自分の書こうと約束している詩は、永遠の霊に祈ることによって得られる詩だと言っているが、『失樂園』は正にそのような、キリスト教の聖霊に祈ることによって得られた詩であった。その冒頭のところで、まず最初の16行で古典叙事詩を超えてゆこうとする抱負を歌ったあと、聖霊によびかけて、次のように言う。

And chiefly Thou O Spirit, that dost prefer  
Before all Temples th' upright heart and  
pure,

Instruct me, for Thou Know'st; . . .

.....

. . . What in me is dark  
Illumine, what is low raise and support;

(I, 17-23)

(殊に汝、ああ御霊よ、なにの宮より  
正しく清き心をえらぶものよ、  
我に教えよ、何事も知り給えば。

.....

. . . 我がうちの暗きを  
照らし、低きを高めかつ支えよ)

これはまさしく敬虔な祈りであって、超越者の前にひざまずいて、とぎれとぎれの祈りを口にするような文体に、ミルトンの謙虚な信仰がにじみでていることが感じられる。

以上によって、若い時からのミルトンの理想への真剣な献身の念、高い抱負と厳粛な使命感、強い愛国心、はげしい道徳的熱意、そしてそれらすべてを根底から支えている純粋な信仰、こういったものはいわゆる幻滅の経験によって失われず、それを超えて一貫していることがわかる。というよりは彼のこのような、信仰に裏打ちされた、一貫した、高邁な、ヒロイックな理想主義、これが彼に幻滅を超えさせ、不遇の中で、畢生の大叙事詩を完成せしめる原動力だったのである。もちろん幻滅の経験がなければ『失樂園』は生まれなかっただろう。しかし幻滅が『失樂園』を生み出したのではない。信仰に支えられた一貫したものが『失

樂園』を生み出したのであって、それを現在あるが如きものにしたのが幻滅の経験だったのである。

## VI

以上によって、ミルトンがはじめの愛国的叙事詩の計画を放棄した理由と、それにもかかわらず彼がついに念願をはたして大叙事詩を完成することができた理由とが明らかになったので、次は、彼がその叙事詩の主題として、「人間の墮落」というものをとり上げたのは何故かということをも明らかにしなければならない。この点に関してバジル・ウィリーは2つの理由をあげている。<sup>(37)</sup>

まず、「ミルトンはおそらく、彼の天才が取り扱うのに最もふさわしい種類の題材の方へ向う彼自身の本性の抵抗できない性向に導かれたのであろう」と言うが、これは究局的原因の指示であっても、当面の問題の直接の答えにはなっていない。

もう一つの理由は、当時の虚構排除の知的風潮の中では、詩の多くの題材のうち聖書のみが唯一の真実なものと考えられていたので、ミルトンは聖書的主題をえらんだというのであるが、これも聖書的主題の多くの中から、墮落の主題がとくにえらばれたことの説明にはならない。

もちろん、この主題はその中にあらゆることを包括し得る包容力のある主題であるから、それがえらばれた理由もいろいろあると考えることができるが、今求めたいのは、ミルトンが愛国的叙事詩をすてて別の主題を考えた時、決定的に彼を動かしてこの主題をとらしめた理由が何であったかということである。

その一番手がかりとなるのは、彼自身がこの詩の目的として述べている次の言葉である。

I may assert Eternal Providence,  
And justify the ways of God to men.

(I, 25, 26)

(永遠の摂理をあかしし、

人々に神の道の正しきを示さんため)

叙事詩に不慣れた現代の読者には、詩が詩以外の目的に仕えるというようなことは、詩にとって自殺行為のように思われるかもしれないが、ルネ

36) Hughes, p. 671. (御興先生訳による。ティリヤード著「ミルトン」18—19頁)

37) Basil Willey, *The Seventeenth Century Background* (London, Chatto, 1934) pp. 225 ff.

ッサンスの詩の考えはそうではなかった。叙事詩は、道徳的、宗教的、政治的あるいは実用的な目的をはっきりもつべきものとされたのである。

しかしそれにしても、ここでミルトンが言明している目的は異常なものである。しかし彼がこのような、誰もまだ試みたことのない異常な目的を目指したということは、それだけ彼がこの問題を真剣に考えていたことを示している。ドグマを理論的に解明しようというのではない。詩といういわば全人的共感を必要とする行為において、これを試みようとしていることは、彼が全人的レベルにおいてこの問題を感じていることを意味している。そして、神の道の正しいことを示そうとすることは、それに先立って彼みずからが神の道の正しさを真剣に問うているということにほかならない。

神を信じるということは問いを投げかけられることである。善にして絶対的な支配者のもとにある世界に、この神の支配と調和しないようにみえることがあまりにも多い。

So shall the World go on,  
To good malignant, to bad men benign,  
Under her own weight groaning,

(XII, 537—9)

(かくて世は進む

善人には幸なく、悪人には幸多く  
己が重荷に呻きつつ)

更に20年にわたる革命の間の経験は、神の正義という問題を、彼自身の問題としてこの上なく鋭く彼に感じさせたにちがいない。神のわざに参加するという使命感に燃えて、革命の嵐の中に身を投じ、平和な生活、詩人としての活動、さらに自分の視力までも犠牲にした彼であったが、その結果はどうであったか。彼の味わったのは深い幻滅以外ではなかった。ここにおいて、彼は神の義はいったいどこにあるのかと問わずにはおられなかったのである。

それでは、神の義を問い、そして擁護するのに、「人間の墮落」という主題をとり上げたのはなぜだろうか。それは、神の義という問題はけっきょく人間またこの世界における悪の存在という問題に帰着するが、この悪の問題を最も根本的なところから扱っているのが、聖書のこの「人間の

墮落」の物語だからである。

このように考えると、革命に参加して味わった深刻な経験の中から、初めの愛国的叙事詩の計画を放棄して『失樂園』の執筆に至る論理がよく納得いくと思う。

しかし、「人間の墮落」という聖書の神学的題材を叙事詩の主題とすることにおいて、ミルトンは大きい困難に直面しなければならなかった。叙事詩であるためには、ギリシヤ以来の叙事詩の伝統の中で書かなければならない。けれども「墮落」の物語はその伝統の外にある主題である。ただ聖書の題材というのなら、伝統に親近性のある題材がほかにいくつも見出すことができるだろうが、ミルトンは、「人間の墮落」というキリスト教のドグマの根本にかかわるテーマを敢えて取り上げて、古典叙事詩の伝統と対決させることによって結びつけるという困難な道を選んだのである。これとくらべるならば、ドライデンの提案している道は全くの中途半端なものでしかないし、彼のミルトン批評も、外面的、技術的なものとどまって、ミルトンの取り組んだ本当の問題を理解しているようには思われない。そこで、ミルトンがどれだけの自覚をもって、この困難な問題に取り組んでいるかを最後に見ることにしたい。

## VII

ミルトンは自分の選んだ主題が、伝統的な叙事詩の主題と根本的にちがったものであることを冒頭からはっきり言っているが、それが最も詳しく言われているのは、この詩がいよいよ中心テーマである墮落の事件の叙述にはいる第9巻の冒頭の部分である。

Sad task, yet argument  
Not less but more Heroic than the wrath  
Of stern Achilles on his Foe pursu'd  
Thrice Fugitive about Troy Wall,

(IX, 13—19)

(悲しきわざよ。されど主題は  
トロイの城壁をめぐる三たび逃ぐる  
敵を追いし きびしきアキレスの  
怒りにも劣らず、更に英雄的)

ここでミルトンは、彼の主題がホメロス、ウェルギリウスに代表される伝統的英雄詩のそれより

も、よりヒロイックであるという。しかし人間の墮落という事柄のどこにヒロイックなところがあるというのか。そこにあるのは勝利ではなく敗北であり、めざましい行為ではなく恥ずべき罪ではないか。ドライデンが『失樂園』の主題は英雄詩のそれではないと批評したのももっともに思われる所以である。しかしそのことはミルトン自身が一番よく知っているところであった。知りつつ敢えてこの主題を彼はえらんたのである。しかもそれが more Heroic であると言う。こう言い切るからには、彼の側に伝統的な概念とはちがった新しい heroism の概念が生まれていなければならない。彼は自分の詩をはっきりと Heroic Song と呼びつつ、伝統的な英雄詩の主題は真にヒロイックと呼べるものでないという。それに対して、彼の歌う主題こそ、真にヒロイックという名に値するものだと主張するのである (IX, 25-44)

このようなミルトンの主張はどんな根拠にもとづいているのであろうか。

プラトンが叙事詩人の仕事を「古人のいさおを言葉でかぎり、後の世の人々の糧たらしめる」<sup>(38)</sup> と言っているように、叙事詩の第1の機能を教化にあるとするのはギリシャ以来の伝統であった。たしかに英雄詩の主題はドライデンが言うように「ある傑出した英雄の偉大な行為である」<sup>(39)</sup> が、その英雄というのはアリストテレスも言うように、われわれよりもすぐれた人物でなければならないし、<sup>(40)</sup> 偉大な行為というのは、人の模範となるすぐれた行為でなければならない。つまり heroic ということは virtuous ということを含んでいるのである。ドライデンはこのような伝統的考えを巧みに次のような言葉で言いあらわしている。「英雄詩の意図は範例によって精神を英雄的徳に形づくることである」<sup>(41)</sup> この言葉にはミルトンも全く異論はないであろう。しかし問題は、伝統的叙事詩が本当にこの目的を果たしてきたのかということである。ミルトンが伝統的叙事詩を簡単に肯定できない理由はここにある。もちろん

叙事詩にたいしてこの様な問題を感じたのはミルトンが最初ではない。紀元前6世紀の哲人クセノパネスがすでに道徳的宗教的見地からホメロスをきびしく批判して以来、叙事詩の伝統の中でも、道徳的面と詩的面とはいつも緊張関係を保ってきたといつてよい。そしてこの緊張関係は、宗教的、道徳的に極めてきびしい要求をもつキリスト教がはいってくることにより、より先鋭化されたことは当然のことであった。ドライデンもこの問題に気づかぬはずはない。道徳的に問題の多いホメロスよりも、後の詩人はみな、ウェルギリウスをむしろ模倣すべきである。<sup>(42)</sup> と言っているのもそのあらわれとみられる。しかし彼の立場はやはり不徹底なものである。彼はアエネイスの heroic virtue として敬神の念 (piety) をとりあげてこれを称揚しているが、<sup>(43)</sup> キリスト教本来の立場からすれば、アエネイスの piety は、空しい迷信的宗教にもとづくものである以上、決して真の piety とはいえない。そして真の piety にもとづかない徳は アウグスティヌスが「輝ける悪徳」 (splendida vitia) と言った通り、徳とはいえないのである。こういうきびしいキリスト教の要求を、割り引きななしに正面からとり上げるところから、ミルトンが伝統的叙事詩の主題を、真に heroic といえないとして、断乎拒否する態度が生じているのである。しかしこれは伝統そのものの完全な否定ではない。伝統的な heroism の概念を徹底的に批判しながら、それを通して新しい真の heroism を打ちたてようという態度である。それは伝統の革新ではあるが、同時に伝統の中の革新でもある。このことが具体的にどのように遂行されているかは別の機会に論じることにした

38) Platon, *Phaedrus*, 245 A.

39) Watson, I, 188.

40) Aristoteles, *Poetica*, 2.

41) Watson, I, 223-4.

42) Watson, I, 186.

43) Watson, I, 188.